

華北農村訪問調査報告(6)

—— 2011年8月、山西省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

華北農村における聞き取り調査を主要な目的として2011年8月11日から28日まで中国を訪問し、8月17日から19日までは山西大学中国社会史研究センターの協力を得て山西省P県D村において聞き取り調査を行った。今回で4回目となった同村における本格的な調査¹⁾における日本側の参加者は、年齢順に内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・小島泰雄・古泉達矢・河野正と部分参加の首藤明和・林幸司の9名であり、他方、中国側の参加者は郝平・常利兵・馬維強・李嘎と同大学院生の張永平・李保燕・郝麗娟・高維娜及び毛来靈・孫登洲の10人である(敬称略)。延べ人数では、前回(2010年12月の16人)を超える19人となった。

本稿では、前稿までと同様に、山西省P県D村における聞き取り調査のうち、毛来靈氏の協力を得て筆者の弁納が聞き取りした内容を整理することに主眼を置きつつも、合わせてその前後に訪問した山西省各地の農村と比較のために今回初めて訪問した河北省石家荘市井陘炭鉱区周辺の農村についても簡単にまとめた。

なお、本稿でも、前稿までと同様に、煩雑さを避けるために原則として常用漢字と算用数字を用いることにし、また、山西省P県D村における聞き取り調査についてはプライバシー保護の観点から地名や実名などを伏せることにした。

I P県D村

(1) WCJ

聞き取り日時：2011年8月17日 15:50～17:10

聞き取り場所：WCJ氏宅

聞き手：弁納才一・毛来霊・河野正

通訳：毛来霊

個人史

- ・1937年11月18日の丑年生まれ。
- ・11歳(1949年), 小学校に入学し, 1956年に卒業した(2年生の時に留年し, 6年間学んだ)。
- ・1956年, P県の中学校を受験したが(当時はP県には1校しか中学校がなかった), 合格することができなかった。その年の合格率は3%くらいだった。また, 当時は小学校を卒業して労働に参加した徐建春という模範的人物にあこがれていたので初級合作社(勝利社)に参加し, 農作業に従事した。
- ・1958年, W庄の初等中学(本村から約7里離れていて, 20～30分かけて小走りで通った。この頃にはP県内にいくつかの中学校が設立されていた)に入学し(その年の合格率は約50%), 3年間学んだ。当時, いっしょに通学した友人のうち, LPW・WYX・WXSは今も生きている。しかし, その3年間は様々な運動に動員されてほとんど勉強はしなかった。例えば, この年はP村(本村から50～60里離れたところ)で住み込みで土法製鉄運動に参加し, 食堂で食事(主に粟)をとることができた。また, この年, 共産党青年団に入団した。
- ・1959年, W庄の人民公社の生産小隊で農業生産支援に動員された。
- ・1960年, ダム(F県分育水庫)の建設運動に動員された。この時期は食糧不足が深刻だったが, 水利建設運動に参加していたので, 食糧は政府から支給された。
- ・1961年8月, 初等中学を卒業して本村へ戻って第3生産小隊(隊長はWLJ)で農業に従事した。この年は本村内の食糧不足は深刻で, よく野草を食べた。
- ・1970年, WYX・WXRの推薦によって共産党に入党した。

- ・1971年から人民公社が解体した1980年までの10年間、第3生産小隊で政治部長を務めた。今は、この10年間のことは話したくないという。

家畜の飼育と肉の消費

- ・1958年以前あるいは解放前は2～3頭の羊を飼っていたが、1958年以降は羊は全く飼育せず、1964年には定期市で購入した子豚を2匹飼育していた。肉はほとんど食べることができず、1年に1回食べるかどうかだったが、その肉は羊が最も多かった。
- ・1964年に結婚した時、結婚費用を賄うために飼っていた豚を1匹殺して村内で売った。

家族

- ・私の家は解放前は約10畝の土地を所有する「中農」で、主に高粱を植えていたが、食糧が不足していたので、父は天主教堂の土地で雇農として働いて食糧をもらっていた。
- ・1964年、劉蘭芳(DY村出身、1939年の卯年生まれ)と結婚した。

(2) LPW

聞き取り日時：2011年8月18日 9:15～11:15

聞き取り場所：LPW氏の新宅

聞き手：弁納才一・毛来霊・河野正

通訳：毛来霊

個人史

- ・1939年6月28日の卯年生まれ。
- ・12～13歳(1951～52年)頃、小学校に入学し、1956年頃、小学校を卒業し、2年間、第3小隊で農業に従事した。
- ・1959年、W庄中学に入学し、WYX・WXR・WCJとは同級生でいっしょに通学し、1962年に卒業した。毎月約30斤の食糧(小麦、高粱、玉蜀黍、粟)を支給された。食堂で配給された食券といっしょにお金(食費は毎月5円で、学校から3元補助してもらった)を支払った。WYXの父親は天津で綿布に染色する仕事をしていたので、やや裕福で、自分の土地は雇

農に耕作させていた。

- ・1962年夏、本村に戻って第3小隊に参加し、毎月約30斤の食糧を配給され、WXRとともに生産大隊の会計輔佐をやった。当時の書記はWXHで、会計はFZYとWYFだった。その後、1年くらいして第3小隊で会計を担当し(WXRは第5小隊の会計を担当)、現在まで続いている。ただし、現在は様々な統計資料を整理したり、医療保険の徴収額を計算したりするだけである。

家族

- ・LPCは父の兄弟の子供(いとこ)である。父は賭け麻雀などの賭博をしてあまり熱心には農業をやらなかったし、農業以外の仕事もしなかった。解放前、私の家は約10畝の土地を持つ「下層中農」だったが、食糧は足りず、野草も食べた。
- ・3人兄弟だったが、家は貧しく、父の兄には子供がいなかったので、2人の兄は父の兄の家に養子に出された。そのうち1人は亡くなり、もう1人は祁県にいる。
- ・1965年(25歳)、隣家のZLY(仲人を専業とし、成功報酬として約3元の価値のある長さ2mの綿布を受け取っていた)の紹介で、RJX(N村出身、1946年の戌年生まれ)と結婚した。結婚披露宴では高粱麵を食べた(小麦粉の白麵はなかった)。結婚費用は約200円で、当時の年収は約300元だった。妻のために上着とズボンをつくり、金の指輪(50元)を贈った。
- ・子供は5人いる。長女のWRM(1946年の午年生まれ)は本村のWJB(商売をしている)に嫁し、長男のWQM(酉年生まれ、43歳)は本村人の妻のDXQとともに油坊を経営し、次女のWRQ(戌年生まれ、42歳)は結婚式の音楽関係の仕事をしているN村のWZLに嫁し、三女のWRF(子年生まれ、40歳)は本村で養豚業に従事しているLXZに嫁し、四女のWRL(寅年生まれ、38歳)はH村のHZY(農業に従事)に嫁した。

(3) WXR

聞き取り日時：2011年8月18日 15:30~17:15, 19日 9:20~9:40

聞き取り場所：WXR氏宅

聞き手：弁納才一・毛来霊・河野正

通訳：毛来霊

個人史

- ・ 1942年7月17日(旧暦6月5日)の午年生まれ。
- ・ 8歳か9歳の時、小学校に入学し、1958年に卒業し、P県第一中学に合格して2ヶ月ほど勉強したが、毎月8～9元の食事代がかかったので、食事代のかからないW庄中学に転入学した。すなわち、W庄中学では本村(生産隊)が食事代を支出してくれて、毎月32斤の食糧が支給された。途中から転入学したので、1958年の土法製鉄運動には参加しなかったが、秋の収穫作業は手伝った。また、1960年にはダム(F県分育水庫)の建設運動に参加した。
- ・ 1961年夏、中学校を卒業し、本村の生産大隊(隊長はWZX)で会計輔佐を担当した。当時の会計輔佐はWBZ・HBY・LPW・HL・WXR・WFY・HDS・TCX・(第9小隊の会計輔佐は不明)・LGHの10人だった(各々が後に第1～第10の各小隊の会計になった)。
- ・ 1962年、第5小隊(小隊長はWH)の会計となった。前年の1961年には生産大隊の会計輔佐が各生産小隊の会計の仕事を行っていた。
- ・ 1963年、第1小隊と第5小隊の会計が交替することになり、第1小隊の会計となった。
- ・ 1964年、四清運動が始まったが、その直前に会計をやめ、第5小隊で農業に従事し、1965年には水利工事にも参加した。
- ・ 1966年、民辦教師(村の小学校と同じ場所にあった農業中学校)となり、国語を教えた。給料は1日当たり0.2元と10点の工份(労働点数)をもらった。ところが、1967年になると、農業中学校が小学校と合併し、1日当たり0.2元の給料はなくなり、10点の工份のみとなった。この時、教えた子供の中には現J市の会計の郭維信もいた。
- ・ 1971年、県城内の第5小学校の公辦教師(8級教師で月給は31.5元)となり、5年間教えた。
- ・ 1976年以降、DY村・XY村・T堡で公辦教師を務め、1988年から14年間はT堡の小学校の校長を務めた。以上の3つの村のうち、現在は工業化によってDY村が最も豊かになったが、集団化の時期はT堡が最も豊かだった。
- ・ 1980年、1人当たり1.82畝の土地が分配されたが、私は教師をしていて

「非農業家庭集体戸口」だったので、土地は分配されず、「農業家庭戸口」(農民戸籍)の妻だけが土地の分配を受けた。現在、その土地は長男が耕作している。

- ・2002年、退職し、毎月2,880元の年金をもらっている。

家族

- ・解放前、私の家は「中農」だった。父のWJS(卯年生まれ)は1988年に75歳で死去し、N村出身の母のWCY(午年生まれ)は去年(2010年)91歳で死去した。私は5歳年上の兄のWLR(丑年生まれ)と2人兄弟である。
- ・1963年、本村人のWQF(1946年2月19日の戌年生まれ)と結婚し、4人の子供が生まれた。
- ・長男のWYL(辰年生まれ、48歳)は、高校を卒業した後、1985年に入隊し、1989年に河北省邯鄲から村に戻ってきて現在まで本村の会計を務めている。妻のHZZ(48歳)はH村出身である。
- ・長女のWCF(午年生まれ、46歳)は、H村のHDR(48歳、職人)に嫁した。
- ・次男のWYQ(申年生まれ、44歳)は、太原で商売をしているので、1980年に分配された7.2畝の農地は本村人に耕作を任せている(各作業に対する支払い額は、1畝につき、春耕が30元、除草が10元、収穫が45元)。妻は本村人のLAF(1968年11月生まれ)である。
- ・次女のWCY(亥年生まれ、41歳)は、W庄のLHW(42歳)に嫁した。夫婦共に教師で、次女は教師進修学校の教師を務め、また、その夫は喜村教育基地の責任者を務めている。

(4) WLR

聞き取り日時：2011年8月19日 9:45～11:15

聞き取り場所：WLR氏宅

聞き手：弁納才一・毛来霊・河野正

通訳：毛来霊

個人史

- ・1937年7月16日の丑年生まれ。

- ・12歳，小学校に入学し，6年間学び，18歳で卒業した後，太原の親戚の家にいて，特に仕事もしなかった。
- ・20歳(1957年?)，P県城の製鉄工場で3年間働いて正式の労働者になったが，4年目で仕事を辞めて，本村に戻ってきて村のレンガ工場で働いた。P県城の製鉄工場よりも給料が高かった。
- ・24歳(1961年?)，本村人のWAX(1943年8月4日の申年生まれ)と結婚し，P県城の文化館の「秧歌」の宣伝隊(歌舞団か?)で3年間働いた(月給は20元)後，本村に戻って第1小隊に参加して農業に従事した。
- ・いわゆる3年困難の時期(1959～61年)よりも1964～68年頃のほうが子供が次々と生まれたこともあって最も生活が苦しく，村々を廻り歩いて鍛冶屋(鍋・釜などの修理か?)もやったが，生産隊から2,900元もの借金をした。
- ・1980年からは家族全員が「秧歌」に参加するようになった(現在でもなおすでに嫁いだ娘も参加している)。同年，10畝余りの土地(6人分)が分配され，中学校を卒業したばかりの長女が5畝の土地に棉花を栽培した。棉花栽培の技術は生産大隊長が他村で勉強して本村民に伝えたもので，さらに私が娘に伝えた。また，残りの5畝の土地には小麦や高粱を植えた。

家族

- ・解放前，父のWJSは22～23畝の土地を所有する「中農」で，母のWCYは織布ができ，DY村出身の祖母は紡糸をしていた。
- ・長女のWCH(1964年の巳年生まれ)は，B庄(本村から7里離れている)のLYP(1962年生まれ，農業)に嫁した。
- ・次女のWCL(1965年生まれ)は，Y堡のLY(1966年生まれ，農業)に嫁した。
- ・三女のWCX(1967年生まれ)は，B庄のZZB(1962年生まれ)に嫁した。
- ・四女のWCL(1970年生まれ)は，本村のGSJ(1971年の戌年生まれ)に嫁した。
- ・五女のWCX(1973年生まれ)は，Y堡のZZGに嫁した。
- ・六女のWCP(1975年生まれ)は，H村のWHZ(1976年生まれ)に嫁した。
- ・長男のWYX(1977年生まれ)は，中学校を卒業した後，親戚の紹介で，1年間，N村の修理店で電動ポンプの修理工をやっていた。妻のRLN(1976年生まれ)はD村の出身である。

結婚式

- ・(1961年?)結婚費用は全部で約500元かかった。妻には上着とズボンを作ってあげ、結婚披露宴では白麵を食べた。当時は、豚1匹と羊5匹を飼っていた。

(5) WBX・WJL

聞き取り日時：2011年8月20日 9:20~11:00, 15:20~16:35

聞き取り場所：WBX氏宅

聞き手：弁納才一・毛来霊・河野正

通訳：毛来霊

WBX・WJL夫婦の個人史

- ・WBXは1949年12月24日の子年生まれで、9歳で小学校に入学し、1961年(15~16歳?),小学校を卒業して第1小隊に参加し、農業に従事した。
- ・妻のWJLは1953年6月6日の蛇年生まれで、7歳でN村の小学校に入学し、14歳、小学校を卒業してN村の第9生産小隊で農業に従事した。27歳(1980年)、N村の仲人業専門者の紹介によって本村に嫁した。

家族

- ・WBXの父はWMQで、75歳(何年かは不明)で死去し、母は本村人のHAY(故人)で、母の父のHBFは太原児童医院の薬剤師、母の兄のHMLは太原紙箱工場の工場長、母の妹のHYYの夫は太原の鉄道労働者だった。HBXにはWGX(N村に嫁す)・WL・WGH(H村に嫁す)・WGZ(結婚して太原在住)の4人の妹がいる。
- ・WJLの父親は鉄道労働者だった。
- ・長女のWZH(1981年[1982年?]4月29日の戌年生まれ)は、太原の芸術職業学校を卒業した後、2009年に紹介によってN村のZHZ(1978年生まれ?,太原大学卒業、太原の建設会社に勤務)と結婚した。
- ・次女のWZR(1983年6月19日の亥年生まれ)は、本村のWHQ(1978年の午年生まれ、建築などの「打工」に従事、その父親はWQL)に嫁した。
- ・長男のWZG(1985年1月8日の丑年生まれ)は、湖南省懷化学院(専門は

工業設計)を卒業し、現在、深圳で「打工」に従事している。まだ結婚はしていない。

農地と農業

- ・1980年、私の家は17畝の土地を分配されたが、妹のWGHがH村に嫁ぐと、翌年には1.82畝の土地(妹に分配された土地)は本村の生産大隊の所有となり、我が家で耕作することができる農地は少し減った。
- ・1980年以降、棉花を栽培していたが、妹が嫁ぐと、人手が足りなくなり、棉花の買い取り価格も下がったので、1985年頃からは棉花を栽培しなくなった。当時は、主に玉蜀黍・小麦・棉花を栽培し、小麦が主食だった。棉花1斤を国に売ると、現金6～7元に加えて2斤の小麦粉と1斤の高梁粉を1斤当たり0.3元(市価は0.6元)で買うことができた。
- ・玉蜀黍は手間暇がかからず、最ももうかるので、最近、主に玉蜀黍を栽培している。他に高梁や向日葵を栽培し、主食である小麦は全く栽培していない。玉蜀黍・高梁・向日葵の大部分は販売している。
- ・今年(2011年)は玉蜀黍・棉花・向日葵などを栽培し、高梁は栽培していない。棉花は去年まで栽培していなかったが、今年はN村に嫁した妹のWGXの子供が結婚するので、必要となる綿(新婚用の布団綿などか?)をあげるために1.3畝の土地に栽培した。棉花は1畝当たり100斤の収穫が予想され、もし販売すれば、1斤20元となり、工場で種(棉実)を取ってもらうのに3斤につき1元を支払わなければならないが、棉実(棉実油を搾った棉実粕は肥料となる)は1斤1.5元で買い取ってくれる。棉花の種は1斤2元で売っている(良質な種は1斤8元)。なお、一般的に棉花を栽培する農家は前年度の種を次年度の播種用としてとっておく。
- ・去年(2010年)は雨が少なかったので、玉蜀黍は8畝の土地から9,000斤(1斤1元)しか収穫できなかったが、今年は雨が多かったので、7畝の土地から1万斤以上の収穫が期待できそうだという。また、高梁は昨年1畝の土地から約1,000斤しか収穫できなかった。さらに、向日葵はアルカリ土に最も強いので、アルカリ土壌の土地に栽培しているが、去年は0.5畝の土地から約300斤(1斤1.3元)の収穫があった。

豚肉加工業

- ・ 1985年以降、店で生の豚肉(「後大腿」)を購入して「猪肘花」に加工して太原(五龍口の卸問屋)まで販売しに行った。1回で200～300斤、毎月4,500斤を販売し、1斤1元で、年収が54,000元となった。
- ・ WBXの下の人2人の妹(WGH, WGZ)が結婚して本村を出て行くまで豚肉加工の仕事を手伝っていた。
- ・ 1996年、現在住んでいる家(かつては脱穀場だった)を新築したために、豚肉加工業は休業した。

乳牛の飼育

- ・ 1997年、12頭の乳牛を購入して(「牛棚」(牛舎)も所有)X村で技術を習得し、牛乳とヨーグルトを生産し、また、他人の牛乳も加工した。超高温殺菌機やトラック3台などを計50万円で購入して乳製品を太原まで売りにいった。夫婦2人と次女(WZR)及び妻の兄の息子が生産に従事し、トラックの運転手を3人雇っていた(本村人で50歳代のWHZとN村に嫁いだWGHの夫及びその息子)。牛糞は自家と親戚(特に次女の嫁ぎ先)の畑の肥料として使用している。
- ・ 2004年、12頭の乳牛を全て売って、他人の乳牛を集めてイリ(乳製品会社)に売るようになった。
- ・ 2008年、親戚から借金して(現在の借金残高は4～5万円)12万元かけて搾乳機などを購入し、他人の乳牛も搾乳した。ところが、同年、石家荘の「三鹿」牛乳事件(メラニン混入)が発覚すると、政府は牛乳を集めることを禁止した。
- ・ 2010年、1頭500円で8頭の乳牛(子牛)を購入した。月1回、村人が牛をつれてやって来て搾乳している。1回で12頭から搾乳することができ(契約総頭数は35頭)、1日3回行う。1頭の乳牛から最高で70斤(平均40～50斤)の牛乳を搾ることができる。その飼料は玉蜀黍と棉実粕である。
- ・ 現在、8頭の乳牛のお腹には全て子牛がいるので、来年には乳牛の頭数が増えて牛乳の生産量も増加するだろうと期待しているという。

II 訪問・参観

8月12日・14日、日本側にとって初めての訪問となった大同市近郊農村を参観したのは、日本側の内山雅生・田中比呂志・祁建民・小島泰雄・首藤明和・古泉達矢・河野正・佐藤淳平・弁納才一と山西大学の郝平(14日のみ)・常利兵・馬維強・李嘎・孫登洲の計14人である。大同市近郊農村は炭鉱が有名である²⁾。

また、8月21日・22日にはこれまですでに訪問している靈石県・霍州市の農村を参観したのは、日本側の内山雅生・田中比呂志・祁建民・小島泰雄・林幸司・古泉達矢・河野正・弁納才一と山西大学の郝平・常利兵・馬維強・李嘎・張永平・李保燕・郝麗娟及び毛来靈・孫登洲の計17人である。

(1) 大同市南郊区口泉郷楊家窰村

当該村は大同市政府が推薦する模範農村で(写真1を参照)、全村民がかつて山の斜面にあった村から新築の豪邸が建ち並ぶ現在の「新農村」に移住しており、田舎の香り(家畜などの糞尿の匂いか?)が立ちこめてはいるものの、すでにいわゆる農村の風貌は完全に失われている。8月12日午後、村に至る道路は舗装・拡張の工事をしていたために迂回して村へ行かざるをえず、約1時間半を要した。その途中の畑で栽培されているのは大部分が玉蜀黍で、一部に粟や向日葵が見られた。

写真1. 楊家窰村衛生所の看板



本村の副書記を務める李樹勝氏が本村の概要を説明した後に³⁾、簡単な質

疑応答が行われた(写真2を参照)。2011年8月現在、本村には344戸の住民が居住している。本村は2004年から急激な経済発展を遂げ、1人当たりの年収は2004年に約2,000元だったのが2010年には約22,000元と10倍近くに急増した。その直接的原因は運輸業で成功した郭占君氏が2004年に本村の書記となり、経済改革を開始したからであるという。

写真2. 楊家窩村副書記主催による説明会



現在、本村内には8つの企業(株式会社)があり、51%の株を村民委員会が所有し(その収益を村民の福利厚生のために使用)、残りの49%を村民が所有している。この8つの企業では主に本村人が働いているが、本村内にある炭鉱企業は国家の所有で、賃金が低いので、本村人で働く者はほとんどおらず、主に周辺の村民が働きに来ている。解放前、本村は、土地が瘠せ、灌漑設備もなく、土地生産性が低かったので、貧しく、人口も少なかった(食糧は自給していた)。

解放後、現在までに22の井戸が掘られ、農業生産性が向上したので、人口が増加したが、現在でも食糧が自給できる。今後は乳牛の飼育を拡大していく計画があり、その飼料としての雑穀を周辺の農村から購入することになるから、周辺の農村への経済的影響も大きくなるだろうという。

最後に、蘭とパパイヤのビニールハウス栽培(ハウス内の温度の調整と管理が完全に機械化されていた)を見学し、農民の豪邸(水洗トイレ・シャワー・各種電化製品も整っていた)を訪問した。ビニールハウスで栽培された花や果実の大部分は大同市(消費市場としては規模が極めて小さいのだという)よりもむしろ中国各地の大都市に直接販売しているという。

(2) 大同市陽高県獅子屯郷后営村

8月14日午前、大同市内のホテルから車で約1時間半をかけて后営村を訪問し、村の書記を務める張金来氏(47歳)から村の概況を説明していただいた後、簡単な質疑応答が行われた。当該村に至る途中の道路沿線には近年に整備されたと思われる植林地が広がっており、畑(農耕地)が少なかった。ただし、県城付近では玉蜀黍を中心に畑作地が広がっており、ビニールハウスもあった。

また、村民委員会に到着すると(写真3を参照)、村の幹部に動員されたのか、老人をはじめとする20人余りの村民が着席しており、窓の外には多くの女性や子供たちが集まって来て中の様子を窺っていた。

写真3. 陽高県獅子屯郷后営村村民委員会



戸数

- ・当該村の総戸数は219戸で、張姓がほとんど大部分を占める210戸おり、これにつづのが3戸の楊姓である。ちなみに、1949年頃は約120戸(人口は500人弱)だった。

灌漑

- ・2003年から植林が進められて耕地面積が減少し、2011年現在では耕地面積は約3,000畝となっている。そのうち井戸による灌漑地は約500畝を占め、深さ100mの井戸が6つある(1960年代の井戸の深さは20mだった)。中心的な作物は玉蜀黍で、1畝当たりの生産量は灌漑地が約1,000斤、非灌漑地が降雨量によって200~700斤である。

農業

- ・解放前は、主に「細糧」(粟・黍)を栽培し、これを市場で売って「粗糧」(高粱・玉蜀黍)を買って食べていた。

収入

- ・2010年の本村の平均年収は2,939円で、収入源としては養豚業が中心で、これに出稼ぎと農業がついでいる。

養豚業

- ・県内の養豚業で豊かになった2つの村を本村の幹部が視察し、1999年から本村でも養豚業が盛んになり、現在、約5,000匹の豚が飼育されている(ほぼ全ての家で分散的に飼育されている)。豚の糞は肥料として用いられ、これによって農産物は約3割の増収となるが、収穫量に決定的な影響を与えるのは水(灌漑の有無ないし降雨量)であるという。

出稼ぎ

- ・現在、本村から出稼ぎに出ている者は約200人で、40歳以下の若い人が多く(たしかに、本村内では若い男性の姿をあまり見かけなかった)、その主要な出稼ぎ先は大同・北京・上海である。本村の労働事務所(?)の紹介を通じて出稼ぎに行く者もいるが、大部分は個人で出ている。

集市(定期市)

- ・本村内で定期市が開かれることはないが、本村から約50里離れた河北省

陽原県東井集では旧暦の2・5・8の付く日に定期市が開かれる。また、陽高県内では本村から約35里離れた県城に市場がある。

廟

- ・本村には廟はない。ただし、大白登村(本村から15～16里の地点)・大泉山村・台良村には廟があり、文革時期に破壊されたが、現在は修復されている。

家譜

- ・かつては家譜があったが、今は残っていない。

日本兵

- ・抗日戦争中、本村にも日本兵は来たことがあり、鶏を奪っていったが、日本兵によって殺害された村民はいなかった。日本兵は、本村から約3里離れた下吾其村に駐屯していた。

婚姻圏

- ・村外から本村に嫁す者は本村の周辺約10里以内にある村の出身者が多い。

話を聞いた後で、本村内を参観した。本村を貫く道路は舗装されており、その道路を歩いていくと、多くの家が驢馬を飼育しているのを見ることができた。

陽高県の県城で昼食をご馳走になった後、内蒙古自治区との境界線上にある長城を案内していただいた(陽高県長城郷鎮辺堡村)。村の畑には背丈の高い順に玉蜀黍・粟・黍・「胡麻」(あわ?。日本で言うゴマではないという)が作付けされていた。

なお、当初の計画では、8月15日に大同から太原へ戻る途中で山西省西北部に位置する山間部の静楽・嵐県・興県・岢県・五寨などの農村を訪問・参観する予定だったが、悪路が続くために訪問を断念した⁴⁾(まもなく道路の舗装が完成し、来年の2012年には訪問することができるという)。これに代わって、渾源県(懸空寺を見学)・応県・代県(郝平氏の知人で、地方幹部の招待で、昼食をごちそうになった)を通過した。その沿道には羊や驢馬の放牧がやや多い感じがした。

(3) 霊石県溝峪灘村

溝峪灘村については戦時中に富家灘採炭所の労働力資源の観点から日本が簡単な調査を実施しており⁵⁾、同村には昨年(2011年)の12月にも訪問したが、挨拶をした程度だった。今回は、まず村の書記の李国華氏に村の概況を説明してもらった後に、長老の李志中氏に昔の話を聞いた。その概要は以下のとおりである。

2011年現在、本村には150戸470人余りおり(抗日戦争前は94戸で、戦時中に38戸まで減少したが、1950～60年代に人口が増加した。村外からの流入人口は少ないという。)、約9割が李姓である。年収は1人当たり約6,000元であるが、農地が少なく、1人当たりの農地はわずかに0.2畝で、むしろ「洗炭」場、運輸業、車の修理、ホテル業、部品販売などが盛んである。改革開放後、養老院が作られ、現在、周辺の7つの村とともに1つの小学校(学費は免除)を建設中である(写真4を参照)。

写真4. 建設中の溝峪灘小学



また、本村は汾河沿いに位置しているので、汾河を利用した灌漑が整備されており、農産物の生産性が相対的に高い。かつては農業が中心で、食糧は現在でも自給することができ、夏は小麦・豆類を収穫し、秋は玉蜀黍を収穫している。なお、蔬菜(灌漑が整備されているので蔬菜栽培が盛んになってい

と思われる)は1畝当たり2,500元の収入を上げている。

聞き取り日時：2011年8月21日 9：30～11：00

聞き取り場所：靈石県南関鎮溝峪灘村村民委員会

聞き取り対象者：李志中(80歳、申年生まれ)

聞き手：内山雅生・弁納才一

通訳：祁建民

日中戦争期

- ・日中戦争中、日本人の経営する炭鉱が開設した小学校(現在、小学校の跡地は汾西鉱物局)に通い、日本語の教育を受けた。小学校に通学すると、村長から1日につき0.05元もらえた。
- ・日中戦争時期、炭鉱には陽泉からやって来た労働者が多く働いていた。本村人で炭鉱で働く者は少なかった(本村人の大部分は土地の上で農業に従事しているので、地下に潜って作業する炭鉱労働には抵抗感が強かったという)。また、当時、本村の周囲には「電網」(電気を通した有刺鉄線か?)が張り巡らされていたので、外部から勝手に村内に入ることができないようになっていた。
- ・解放前は、農閑期の副業としてはレンガ造り(石炭を燃料として)や石灰造りがあり、鶏・牛・馬・豚なども飼育していた。

解放後

- ・土地改革の時、本村には富農が3戸いたが、地主はいなかった。土地分配は1人当たり1畝未満だった。
- ・汾河沿いの農地には人力で灌漑設備を作った。例えば、三湾口(溝?)を作って汾河から水を引いたが、現在は道路が作られてふさがれている。1960～70年代にダム(汾河沿いの堤防?)が建設され、1996年にも新しいダム(?)が建設された。
- ・本村にはアルカリ土質の農地はなく(灌漑されていたためか?)、かつては主に小麦・高粱・玉蜀黍を栽培していた。
- ・本村にはかつて廟や劇場・舞台があったが、現在は壊されてなくなって

おり、祠堂もない。また、靈石や双池には定期市が立つが³、本村に定期市はない。

本村の書記の李国華氏の案内で建設中の溝峪灘小学校を見学している時、1人の老人が近づいてきたので、話を聞いて見ると、本村の書記の父親(83歳)だった。次回の調査では是非とも話を聞いてみたい。また、汾西鋳物局(日中戦争時期の小学校の跡地)の近くにはかつての炭鋳労働者の寄宿舎のような建物が残されている。

(4) 霍州市四社五村

8月21日午後、霍州市水利局副局長の案内で七里峪を訪問・参観しようとしたが、途中まで行ったものの、道路工事中で通行止めのために訪問することができなかった。そして、翌8月22日午前、霍州市水利局局長の張愛国氏の案内によって霍州市四社五村の中の中心的な村落である義旺村を訪問した。前村長の王氏(現在は義旺村の水利管理站長)が水利に関する簡単な説明をしてくれたが、詳細は祁建民氏による報告書を参照されたい⁶⁾。

(5) 河北省石家荘市

井陘炭鋳周辺の農村については、戦時中に日本がその炭鋳労働力を確保する観点から調査を実施している⁷⁾。

8月24日早朝、太原から北京へ飛行機で移動した後、内山雅生・田中比呂志・祁建民の3人が中国社会科学院経済研究所で資料収集を行い、一方、林幸司・古泉達矢・河野正・弁納オーの4人は北京首都飛行場から北京西駅までタクシーで移動して、さらに、電車に乗って石家荘市を訪問し、河北師範大学歴史文化学院教授の張同樂氏及び同大学法政学院教授の霍紅偉・張志永両氏と夕食(石家荘は都市としての歴史が浅いので、いわゆる石家荘料理というものではなく、食事をしたのは保定料理のレストランだった)をとりながら、意見交換と翌日の打合せをした。

翌25日午前、霍紅偉氏に案内していただいて石家荘市井陘鋳区(かつて炭鋳があった地域)及び炭鋳周辺にある村の1つである井陘県北正郷北正村を訪

問・参観した(写真5・写真6・写真7を参照)。高速道路を利用して鉞区の料金所を出る時に、職員に何をしに来たのかと詰問され、また、北正村内を参観している時に、村民にどこから来たのかを尋ねられた霍紅偉氏が石家莊(河北師範大学)からだと答えて我々日本人が来ていることを伏せようとしているように思われたことから、改めて河北省における農村参観の敷居の高さを感じた。

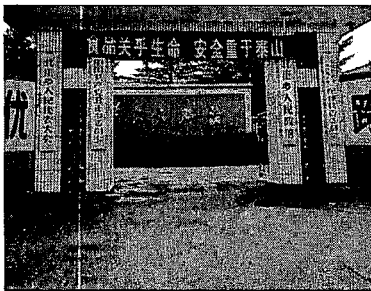
写真5. 北正郷北正村への入口



写真6. 北正村内の通り



写真7. 北正郷人民政府



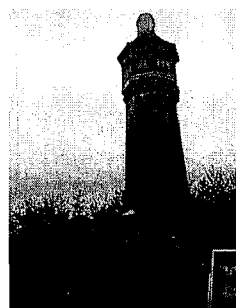
鉞区にある鉞務局の近くの「老井」(滑車で人や石炭を運ぶためのもので、段祺瑞政権の時、ドイツ製の送風機械を購入してドイツ人技師が来て作ったという。写真8を参照)と「塔」(煙や水を外部に逃がして出すためのもの。写真9を参照)を見学していると、たまたまその前の小さな広場に現れた寧志謙氏(78歳)が昔のことを話してくれた。同氏は、定県(現在の定州)の生まれだが、

日中戦争中に日本軍に親(父親か?)を殺されて苦しい生活を強いられ、1952年(16~17歳頃)に井陘炭鉱にやって来て働くようになったものの(労働者としては最高水準の「8級工人」となった)、子供が多くて生活が苦しく、豚を飼育してもらう。そして、1958年以降は多くの炭鉱労働者が村外からやって来たという。話を聞いている途中で、四清運動の頃に幹部で文革中に批判されたという老人(91歳)も現れたが、時間がなく話を聞くことはできなかった。しかも、ここでも霍紅偉氏はやはり一刻も早く鉱区から立ち去りたいという感じだった。

写真8. 井陘炭鉱「老井」



写真9. 井陘炭鉱「塔」



また、同日午後、移転したばかりの校舎で張同樂・霍紅偉・張志永の各氏以外にも河北師範大学の教授で副校長の戴建兵氏(経済史が専門)、同じく教授で歴史文化学院副院長の谷更有氏を初めとする約10人の教員と数名の大学院生との間で座談会が開催され、意見交換を行った。短時間ながら、形式よりも実質を重視するという点で、予想以上に非常に内容の充実した座談会だった。

ただし、8月26日午前に予定していた2ヵ所の書店における文献図書の収集は、その書店の1つ(文史資料などを販売しているはずだった)がなくなっており、もう1つ(地方史に特化した古本を扱っている書店の1室)は鍵がかけられていたために入室することができず、全く成果を上げることができなかった。

おわりに

山西省北部の大同市は同省の中で省都太原市につぐ第2の都市とされており、2011年8月現在、高層ビルなどの建設ラッシュの真っ最中である。太原市と同様に、大同市においても都市の発展に伴う市街地の拡大すなわち市街地周辺農村の市街地化が進行しており、今後、都市近郊農村にも少なからぬ影響を与えていくものと予想される。また、前回(2010年12月)訪問した山西省南部の農村と比較検討する必要がある。

山西省P県D村における調査では、山西大学側とりわけ修士論文を作成中の大学院生たちはすでに各自テーマを設定して焦点を絞った聞き取りを行っていたが、日本側は今回ようやく各自の問題関心に少し焦点を絞って聞き取り対象者を選択した。次回の聞き取り調査では、各自の研究成果をとりまとめるための準備作業を本格化させることになる。

なお、河北省石家荘市への訪問を通じて、河北師範大学が海外の研究者との学術交流に積極的であり、我々の訪問に真摯に対応してくれたことに好印象を抱いた。だが、河北省農村地域の閉鎖性に加えて河北師範大学が農村調査を実施した経験がないと思われることから、今後、たとえ河北師範大学の協力を得ることができたとしても河北省農村において本格的な聞き取り調査を実施するのはかなり困難であることが予想される。

注

- 1) これまでの調査内容をまとめたものとして、拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月、山西省太原市・霍州市農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号、2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月、山西省太原市・霍州市・平遙県農村」(北陸史学会『北陸史学』第57号、2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月、山西省P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号、2011年2月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月、山西省P県の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号、2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月、山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号、2011年12月)、内山雅生・三谷孝・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第11号、2010年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(2)」(長崎県立大学国際情報

- 学部『研究紀要』第12号, 2011年12月), 田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)』第62集, 2011年1月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2010年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)』第63集, 2012年1月)がある。また, 山西大学側の調査内容をまとめたものとしては, 行龍・郝平・常利兵・馬維強・李嘎・張永平(弁納才一訳)「山西省農村調査報告(1)－2009年12月, P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月), 行龍・郝平等(弁納才一訳)「山西省農村調査報告(2)－2010年7月, P県の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月), 郝平・常利兵・馬維強・李嘎など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告(3)－2010年8月, P県の農村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)』第63集, 2012年1月)を参照されたい。
- 2) 戦時中の大同炭鉱区農村に言及している日本の調査報告書には, 華北綜合調査研究所経済局『炭鉱労働力創出過程調査要綱 第二部 大同炭鉱』(1944年)と華北綜合調査研究所経済局『炭鉱労働力創出過程調査(第二次中間報告)－大同炭鉱労働力の質的構成とその創出諸契機』(1945年)があるが, とともに未見である。
 - 3) なお, 2000年から2010年までの約10年間における楊家窑村の概況は『魅力楊家窑』(中共大同市宣伝部, 2010年)に詳しく述べられている。
 - 4) 戦時中の山西省西北部農村に言及している日本の調査報告書としては, 華北交通太原鐵路局総務処資料科『山西省静楽, 嵐県, 興県, 岢県, 五寨各県事情調査報告(蘭村支線背後地ニ関スル経済考察)』(1940年)がある。ちなみに, 上記各県における耕地面積の割合は, 静楽が17%, 嵐県が4.6%, 興県が1.9%, 岢県が3.2%, 五寨が10.3%で, 農耕地が非常に狭小だった。
 - 5) 『山西省靈石県第三区溝峪灘村ニ於ケル労働力資源調査概況報告』(北支那開發株式会社, 1942年)。
 - 6) 祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(3)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第13号, 2012年12月刊行予定)。
 - 7) 華北綜合調査研究所『井陘炭鉱に於ける労働力と食糧に関する問題－食糧ト炭鉱生産力トノ関係ニ関スル調査(一)』(1944年)。